

《書 評》

宮本久雄 著 『言語と証人』を読む

—「招き」に応え、相生を模索する—

Book Review Respond to callings

田尻 真理子

我々の周囲で生起する様々な事象は、言語化／概念化を経なければ、或る一つの「出来事」として認識されず、存在さえしないことになる。たとえてみれば、液体状の物質はそのままでは無定形だが、容器に入れると、その容器の形状をとり、我々が形を知ることができるのに似ている。

ただしここに一つの陥穽が存する。我々に認知可能な一つの「出来事」として言語化されるや否や実体化され、当該の事象に含まれてははずの豊かな内容や、批判されるべき事柄がそこから排除され、膠着状態に陥りやすいからだ。液体状の物質が円柱状の容器で氷った際に、円柱として固体化し、それ以外の形状とはならないのと同様だ。

本著で語られる「言語」とは、こうした実体化、膠着状態を招く言辞ではなく、「貧しく小さい人々が生きる喜怒哀楽に満ちた出来事であり、かつ苦悩と希望の声、言葉である言即事（ヘブライ語「ダーバール」）を指す。」（『言語と証人』8頁、以下頁のみ記載）それは、政治であれ、思想であれ、宗教であれ、歴史であれ、何らかの目的、到達点、道筋を遂行するよう定められた「大きな物語」の言語ではなく、「大きな物語」のもとで抑圧され、搾取され、喘ぎ、苦しむ「貧しく小さい人々」の「小さな物語」（ブルデューなら

la misère du mondeというところのもの)の言語であり、それらの人々の「生きる『生』『出来事』であり、かつ彼らの『声』『語り』を示す。」(3頁)

「言即事(ヘブライ語「ダーバール」)」と筆者が断るのも、「集めて一か所に置く」を原義とする静止的・固定的なギリシア語「ロゴス」に対して、不断の生成変化にのみ存在を認めるヘブライ世界の「<sup>ダーバール</sup>言葉」が即「現成」するダイナミズムを本著での「言語」に求めるからに他ならない。

かくの如き「言語」を紡ぎ「証しする人格(persona)」が「証人」だ。ペルソナは、「実体的存在を脱するエヒイエ(脱在)のエネルギーである霊(プネウマ)の息吹(風)を自ら通して(per)、息吹かせ声にして響かせ(sonare)、その声の他者への語りかけによって他者と相生していく…」(8f頁)「実体の流動化、解体、そこからの離脱」(10頁) —上の例に因めば、いわば固体を溶解すること—であるエヒイエ(脱在)の響きであればこそ、「証人」の言語は実体化に陥らず、つねに他者に対して開かれたものとなる。

では、なぜ今、エヒイエの証人の言語が要請されるのか。

報道を一瞥すればロシアのウクライナ侵攻、中国によるウイグル自治区の抑圧と大量虐殺、ミャンマーのロヒンギャ迫害、イスラム圏における女性の抑圧・虐待等々、人間(性)や自由の死と抑圧の事例に事欠かない。こうした非・反人間的事象のもとにある「悪魔的ともいえる働き」を筆者は「根源悪」とよび、現代が根源悪の諸現象(根源悪自体を理解・把握することは不可能であり、我々はそれを示す現象にのみ出会う)に覆いつくされていることに警鐘を鳴らす。

根源悪の諸現象は共通して「存在神論的」イデオロギーを伴う。存在者の存在を問う存在論は、「存在」という普遍的な概念にとどまる

だけではなく、その究極原因を問題にするや、究極原因（起動因、神）を頂点とするピラミッド構造のもとに世界を統合する「存在神論」となる。一切をハイエラキーのシステムの中に位置づける存在神論は、システムに収まり切れないものを放擲しなきものとす、きわめて全体主義的な思想である。我々／の世界は、この全体主義的存在神論に支配されつくしているという。

証し人である「貧しく小さい人々」の言語が要請されるのは、存在神論の全体主義的な「大きな物語」を超克するエネルギーをこの人々の「小さな物語」が秘めているからに他ならない。

その証左として筆者は、神の召命に答えて「貧しい人のなかのいちばん貧しい人に仕え」たマザー・テレサの言葉と、マザーの信仰・霊性の深まりとともに出来した、靈魂の浄化の苦しみであるところの「靈魂の暗夜」を（第十章）、また、水俣病患者のうちにたましいの原故郷であり「存在の母層」である「アニマのくに」をみだし、文学により近代の超克を図った石牟礼道子を（第十一章）あげる。

超克されるべき、全体神論的根源悪の現象としては、アウシュヴィッツ、エコノ＝テクノロジーロクラーシー（経済＝技術＝官僚）的全体主義支配において「総駆り立て体制」（Gestell）（ハイデガー）によって「用材」として支配され、廢材として忘却される人間（第一章）が考察される。

「根源悪」そのものについては、先に述べたように直接概念化の対象にはならないが、「創世記」の原罪とアウグスティヌス『告白』の「梨の実の盗みの物語」の解釈を通じて、「三つの関係性の破綻」、すなわち、「神と人間の根源的関係の破綻」、「人間関係の破綻」、「人間と自然の美しい創造関係の破綻」（57頁）として捉えられている（第二章）。それらは煎じ詰めれば、「おのれが神のごとくある」

という傲慢<sup>ヒュプリス</sup>に根差す、他者の他者性の絶対的否定、虚無化であり、アウシュヴィッツも原爆投下もフクシマもこの他者抹殺の装置であり暴力に他ならない。

筆者は、この根源悪の諸現象を乗り越える方策として「エヒエロギア」を提示する（第三章）。「エヒエ」を明らかにするために、「出エジプト記」を繙きながらその特徴が挙げられる。まず、ヤハウエは天上にとどまるのではなくイスラエルの民のために歴史世界に登場することから、「他者に向けての自己脱自・脱出」＝「脱在」であること。第二に、神名開示が不完全なところから、人間による操作（魔術的關係）の拒否、「自由な関係による自己贈与」であること。第三に、「共にある」「共在の働き」であること。第四に「善き相生を実現する働き」であること。これらの「エヒエ」の特徴をもつ「エヒエロギア」により存在神論の全体主義を脱して「他者の地平を披く」際肝要なのが、「他者を志向する」エヒエに要請される「他者の物語」である。

その際、「物語り（ダーバール＝ナラティブ）」とは何か、を「善きサマリア人」の譬えを例に明らかにし（第四章）、語り方の例として、ギリシア教父、サルトル、スピノザ、アシジの聖フランシスコ、道元、石牟礼道子、西田幾多郎らの語りがあげられている（第五章）。

ただし、譬えにせよ、語りにせよまずは一方的なアピールとして他者を招くものである以上、本著に出会った我々は、これに応じて応えることが請われている。